

台風15号災害復旧支援

八街隊友会報



支部長 内田 豊

令和初年の師走も残り僅かとなり、時の流れの速さを痛切に感じる今日この頃です。例えば、九月以降、八街市は台風十五号、十九号、八街豪雨等、過去に経験したことがない災害を蒙りました。八街隊友会の皆様に於かれましては、少なからず被害を受けられたと推察します。ここに改めて、被災された皆様にお見舞い申し上げます。



倒壊した車庫を解体・廃棄 (八街へ地区)

さて、台風十五号の災害復旧に関連して、本会特別会員である加藤弘市議及び山口孝弘市議並びに八街市社会福祉協議会から支援要請があり、八街隊友会有志は九月十八日から翌月七日まで約二週間、災害復旧活動に従事しました。八街南部地域を重点的に、飲料水とブルーシートの個別配布、倒壊した車庫、物置等の解体・廃棄、ビニールハウスの解体・廃棄、倒木の伐採・廃棄、倒壊フェンスの修繕、ボランティア要員の移送、災害情報の収集・伝達等、支援内容は多岐にわたります。現役隊員並みの体力が要求されましたが、事故もなく、無事支援活動を終了することができました。支援要員の年齢(六十代後半から七十代後半)を考慮すると、このような重労働に耐え切った元自衛官のずば抜けた体力と気力を再認識した次第です。そして、本支援活動を通して、多くの被災された方々から心温まる感謝の言葉を頂き、本会の活動指針の一つである「地元公益活動への積極的参加」を全うできたことは、大きな喜びでありました。今後とも同様なケースが生じた場合、可能な範囲で支援をしたいと考えておりますので、その節は、よろしくご協力下さい。また、よろしくお願い申し上げます。最後に、新しい年が会員の皆様にとりまして幸多き年となることを、ご祈念申し上げます。

発行日
R1.12.22
発行責任者
内田 豊
年1回発行



災害検証

遠藤 二郎 支部員
(空自通信保全隊出身)

(支援概要)

- ・期間：9月18日～10月7日(実働日数12日)
- ・総支援時間：109時間15分
- ・支援延べ人数：37名
- ・支援車両：3台
 - ・街宣車(山口市議)
 - ・自家用車(遠藤支部員)
 - ・1.5tトラック(繁田支部員)
- ・総走行距離：985km
- ・経費支弁：八街隊友会



電柱倒壊による停電被害(大間地区)

今回の台風災害の特徴は、東日本大震災時を上回る大規模停電という、これまで経験したことがない電力災害の特異性が挙げられます。強風による家屋被害もさることながら、私たちが文化的生活を営む上で必要不可欠である核心インフラの崩壊は、救援活動にも大きな支障をきたしました。特に、通信回線の遮断による救援活動の遅延は極めて深刻で、救援を待ち望んでいた被災者の方々、中でも高齢者等、災害弱者と称される方々のダメージは大きく、現行の防災マニュアルの抜本的改革が急務であることを痛感した次第です。

(裏面に続く)

紙面の都合上、概要程度の内容になることをご容赦願います。

皆様もご承知の通り、台風十五号は、八街市にこれまでにない甚大な被害をもたらしました。残暑厳しい中、約二週間以上停電が継続し、原始的生活を余儀なくされた方々、ビニールハウスの全壊して作物収入が皆無になってしまった農家等、私が直面した現実、それまでの「八街安全神話」を崩壊させるに十分な出来事でした。

しかしながら、被災から三か月も経つと市民の記憶は日毎に薄れ、忘却の彼方に追いやられているように思えてなりません。そこで、記憶が風化する前に、今一度関係者が災害の検証を行い、防災体制の不備を正し、より強固な防災体制を再構築する必要があります。

これから述べる検証は、私が八街隊友会災害復旧支援員として、約二週間にわたる支援活動を通して、現場の物理的被災状況及び被災市民の心理状況を整理統合した現場視点による私的検証です。この検証が、防災体制再構築の一助になれば幸いです。

通信途絶時の伝達手段

私たちの災害支援は、主に長期間停電が継続している八街市南部(特に沖地区)を重点的に行いましたが、同地区の住民は、家屋の修繕、飲料水及び食糧の確保等、生命を維持するための日々の活動に疲弊し、身も心も限界に達しており、特に、災害関連情報の入手に難儀しており、同地区が陸の孤島化している実態が明らかになりました。停電によりTV、ラジオ、電話、携帯等、主たる入手手段が閉ざされ、市の防災行政無線も伝播状況が悪く、全く役に立ってない状況を見るに、住民の方々のご心労は察するに余りあるものです。私たちは、このような状況を改善すべく、同地区を限なく巡回し、飲料水とブルーシートを配布する傍ら、最新情報を提供しました。住民の一人は、「私たちは八街市から見捨てられたかと思っておりましたが、そうではなかったのです」と、安堵の笑みを浮かべておられました。正に「ドブ板選挙」ならぬ「ドブ板広報」が究極の伝達手段であることを確認した次第です。



飲料水とブルーシートを個別配布(沖地区)

災害弱者に対する救援体制

今回の災害において、災害弱者と称される高齢者、病人、障害者、乳幼児を抱える家庭の方々、非常に大きなダメージを受けました。実際、飲料水が皆無になった独居高齢者(沖地区)、損壊した自宅を修復中、過労により死亡した高齢者(災害関連死・八街(地区)、家屋損傷による冠水で、生後一カ月の乳児が危篤になった家庭(大間地区)等、枚挙にいとまがありません。これは、災害弱者が健全な家庭と比べ、行動力に乏しく行動範囲が極端に狭いことが主たる要因ですが、居住する地域の生活環境も大きな要因となっています。救援活動を通して知ったことですが、大きなダメージを受けた方々の殆どが、新興住宅地に居住する新住民(他の市町村から流入してきた住民)なのです。農家(先住民)のような親戚縁者を中心とした強力なネットワークがなく、相互扶助希薄な生活環境が救援延を助長している一要因であることは間違いありません。人口比において、新住民が先住民を凌駕している現状を見るに、既存の民生委員制度とは別に、災害弱者救済のための新たなネットワークを構築する必要性を痛感した次第です。



提言

災害ボランティア隊の創設(常設組織)

このたびの災害復旧に際しては、市内外から多くのボランティアが参集し、多大なる貢献をしてくださりました。復旧作業の中心的役割を担うと共に、見返りを求めない奉仕の精神は被災住民に大きな希望を与えてくれました。この貴重な人的資源・戦力を効率よく運用するには継続性が要求されます。そこで、災害救援に特化した常設のボランティア隊を創設し、災害発生時において迅速な救援ができるよう、現行のボランティア制度の抜本的改革を提言します。常設組織にすることにより、定期訓練が可能になり、ボランティア隊員のスキルアップを図ることができるようになります。災害の余韻が残っている現在、この制度に対しては、多くの市民が賛同し、隊員として応募してくれるであります。しかしながら、この制度は一朝一夕には確立することはできないので、段階的に整備・拡充しなければなりません。その第一段階として、災害情報の正確性を期す観点から、八街市を基盤の目的の如く細分化し、そのエリアに定点監視ボランティアを配置することです。災害発生時において、担当エリア内の道路寸断、冠水、停電、家屋の損壊、災害弱者等の被災状況を目視調査し、本部にフィードバックする役目です。この役目こそ災害復旧の要であり、以後の復旧支援活動を円滑且つ効率の調査です。高齢者でも対応可能で、費用もかかりません。この第一段階の整備が終了した暁には、前述の災害救援の諸問題は、雲散霧消することでしょう。

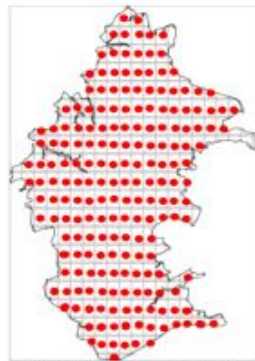
出来ることから始めよう

新しい制度を作り上げるには、多角的な観点から検証しなくてはなりません。その時間がかかります。しかし、災害救援という緊急性が高い案件は、個々の検証が終了次第、即、実行することが肝要です。総合的な検証を待たずに、現在出来ることから始めるのです。はじめの一歩を踏み出しましょう。

リスクを恐れるな

新しい制度を作り上げるには、前例がないので、リスクというマイナス面を考え、萎縮してしまう傾向があります。しかし、リスクというのは、試行錯誤を繰り返すうちに自ずと消えてしまうものなのです。したがって、リスクなど恐れることは無いのです。前進あるのみです。八街市が更なる発展を遂げるよう、共に頑張ろうではありませんか！

最後に、今回の災害復旧に関しまして、昼夜兼行、粉骨砕身の対応をしていただいた八街市役所及び八街市社会福祉協議会の職員の皆様に厚く御礼申し上げます。



定点監視ボランティアの配置図